只見短歌会　四月詠草

大塚栄一　指導

昼は咲き夜はつぼみて片栗の日々色褪せる様を淋しむ　小倉キミ子

新学期の女孫の話題多くなり夫も夕餉の席に長居す　古川　英子

雪解けの花壇の隅に光さし咲く一株の福寿草見る　関谷登美子

啄まれまばらになりて咲く桜常より大き花開きたり　五十嵐夏美

季節外れの雪降りて寒し入院の友を気づかひ心痛みぬ　馬場　八智

常よりも芽吹き遅しと夫言ふに庭木の囲ひ解くを戸惑ふ　目黒　富子

東京は桜満開妹の誘ひの電話に外は吹雪ぞ　渡部ゆき子

名勝の桜並木は曇り日に色淡くして車にて過ぐ　渡部ヨリ子

二か月の入院解かれ礼深く弥生の晴れし午後退院す　新国　洋子

（出　詠　順）

只見俳句会　五月例会

目黒十一　指導

広辞苑載せて一人の春炬燵　一灯

耳遠くなれど聞きたし春の音　又壱歩

濁りたる雪解け川の瀬音かな　恒夫

解けぬ雪まだ三尺や四月馬鹿　恒夫

山伏の修行の道や雪椿　吉児

一匹の井守に集う村普請　吉児

雪載せるしだれ桜の目眩しかり　邦夫

母子草遠き日の餅偲びけり　邦夫

初音聞く去年もこの径このあたり　笑羊

山桜かんざしにして蒲生岳　笑羊

風止みて孕雀のあくびかな　リウコ

春満月母となりたる牛の声　リウコ

芽吹き初む柳や川原荒涼と　都

煌々と照りて四月の月寒し　都

だまさるを知りつつ話す四月馬鹿　都

花冷えやロ一文字にノート書く　都

月並みにひたすらに生く福寿草　康女

わだかまりを捨て春の陽を仰ぐ　一穂

新聞の太刀振り回す端年かな　一穂

新緑の新宿御苑快晴に　洋子

まんさくや笑いこらえる乙女いて　洋子

長靴を仕舞いし後のぼたん雪　礼

雪じめり残る根方や初桜　信

柳大樹萌ゆ夕空の風の中　信

葉桜や戊辰の役を経し城下　藤彦

卒業歌巣立つ子達の目に涙　藤彦

飛び跳ねる池の緋鯉や水温む　邦男

囀や妻は朝からよく動き　邦男

雪囲い解く声高のヘルパーさん

段々の田の面にゆるるブナ若葉